傳奇東西評林

特別
又ラ
5162

門又ラ
號162
卷

紙藏
昭和二十四年十二月

東關脇小結前頭

藤ノ森澤六
但馬秋生藩
廣澤紀次郎大夫
玉山秋山儀右衛門

御覽

西大關脇小結前頭

白石新井筑後
仁齋伊藤源佐
南部藩家老
周南山縣安助

前頭　藤樹中江與右衛門
前頭　播州細河村人　堀寓藤原欽夫
前頭　名直清　東涯伊藤元藏
前頭　一本堂香川太仲
前頭　觀海松崎才藏
前頭　鳩巣室新助

元祿年中ヶ丁ヶ八ヶ条近
日出博士之藉流ホて角力
興行仕ル

前頭　錦里木下頌菴
前頭　南李南村梅軒
前頭　明霞宇野三平
前頭　東洞吉益周助
前頭　象山片山冬藏
前頭　青木文藏

同　雄是奇世笑夫
同　聞齋崎嘉藏
同　太庚赤松弘
同　名古屋玄醫
同　子寧鶴殿左膳
同　香月牛山
同　白駒岡太仲

同　義仲坂倉安重
同　山鹿高祐
同　三浦平太文
同　稲若水
同　貝原好古
同　多田伝部
同　戸田將宮
同　南宮弥六
同　服部原卿

同　滿水宇佐美惠助
同　中村惕齋
同　中西曾七郎
同　今大路道三
同　仲英服部南
同　北山壽菴
同　平河源内

同　金花屋源兵衛
同　藤井源兵衛
同　井上東溪
同　松岡玄達
同　桃原玄輔
同　新井白鯨
同　望月三英
同　伊藤大蓋
同　熊谷子芳

行司　桃花老人　舜水　羅山　世話役

角力勝負附評判

む勝負なしの分ハ後日勝負

附小出ーーーーーー

岡白駒

平河源内

行司

見物

西の方ハ勿論東のちうもう家ーー出る角

力でハ世ゝ。出来秋ふ男舎へまるつ〻。
見る人も賞ふ。モツト引下ケ場 行司 宴
ゞ角力の見ゝ場。男のよひや云ひきの美(ぜい)
ぜゝつぐ〻ごぜ〻め。淨瑠人ゝとふまハ
きゝなまぶゝと能く利(きい)く淨瑠(てぎハ)源吉
かゝと切りろゝゞ見へます。サレド平河
ふゝ。仕まいの一番ふ土俵(どひやう)へ出ゝる

ゝ絡〻〻殺されバ。猪ハ元ゞ
の方。自弱〻〻

香月牛山
北山壽菴

行 淨瑠人ゝとふむゝ〻のまゝ
香月の食鏡今りゝ〻ゝまり箱の
引出ゝるゝ合のまきゞ見へ

ます。先ハ大功く小児必用記ハ清傳
復の六韜三畧能く手が出りましる。
此上の口決集。重寶いろしますゞ力
ハそと有ま勝ハ牛山

鵜殿子寧
服部仲英

扨く若君ととふ。長眞多ひ清方。仲英ふ

乎。子寧の府下に絵鸞くりしよるま。
蘐園の獨角力。そをより花の波とと
渉出世。踊海集のこりし波きびしさ
清手きは。んこりふ人ハ。ふか影ふきゆくと
消しますす。［ワルロ］西のこやの先生也へ神
力が有るうちもしく。にかじりふ世ゝ呑倒ま。
晋人の風を想ろしくゑりしまて。［仍問］東の

方も充へすりの山沙出世。ちう〳〵ハとも
ひつまぢ〳〵ん沙出際。文集ハ〳〵
なりけり。殘念く。是と東の方ろ
勝と見へます

名古屋玄醫
今大路道三

沙出者のし旅と書ひ。今ハ摩治の
風とかうり庚〳〵さが。今大路の先生
沙勝と見へます

赤松弘
中西胃七郎

沙出人〳〵と。力ハ扨れど相差ど〳〵
大庚ふ〳〵。うう多ひる〳〵雖ろ〳〵。跳
[illegible]ふ玉るまぐく。能く說さまる。

なんぞそんな事はも食べをする。至
と法利はぞんぞ。出来さう 行司 なる程
法師人の法にのつとをひも。法をのつと
ある事。大度ふはい事ふるぐず。技藝
ふるく。けつらまてつ事なまど。家
でもく法を知る。又は豪勇な志の事を
評じますまバ。ぐぐく。小な物こせの

中ふ引出すふを地ぶびませぬ。一す
論じます所ぐ。赤茅紙の八人藝。
能く。俗ふとまるこ馬遊回。素讀ぐ冊を
すぬ所ふ。見儀ぎくくをなさるふ二女持
まる。一日法論ぐくをごぢぬ。丸まの
中孝經論語ハ見ますぐ。のとの
七まハぞふのふ中 ヨろこ 妹のちりげ

ぐ出世し給といふ風説 弘月 いろ
き給その評判と。一驚有つゝあれども
人々はふハ戸ゞゝまゝ。沢の有る事
と見へます。然時ハ物徂徠の先り
場也。海内の人物。有智世智。来落ま
後ひゝまで。山先生ハ有るんと存じ
らまゝ。中西ハ江戸へゝゝく。是

五

須多く。浄門人如来ゝを用ゝ乃
浄も世。の泥陀の光りも建立次第
ゝ。能ひ浄土子有んく大学
くゝ。ずゝハ西の浄土勝

山崎闇齋
中村惕齋

東の方山崎ゝ。すんゝう詰ゝる

すもやうらなし。本絹繹かくれなく。柏堂の鼓向。唐士も日本も胡椒丸呑。せずのぐさぬ御手ぎハ。能ふ無りましき。中むかしハ異なく屋よりの出世二體童覧の御涼切。今ハ見る人も無ありと。唇ひらしめし。南郭集乃ぬきもの。李王の詠

なめるお方のはなく。なめさへいたしハとしく。あまりこれなし事。まとの君子ぐごさるに。山崎が勝とハまた。

兼山冬藏
観海才藏

近ごろめきましき御あん人御も情以財。笑ましくも昇られしに。笑しく

殘(さん)惜(をし)く。東乃方ハ兼山小高く。長き利き
ゆゑ。大力のかゝさぶらう。とり組で
多くまけ乃世しい大丈夫(しゆうぶ)。西の方觀
海ふくと。多利の上の方ゆうとし力も
有れど。相撲(すもう)ハ大力夜油(やゆ)なるゆ。
東ふ勝ゞ迄ゝまする
所屬ぐちゆうぶ中ぐらまする。

花入乃角力ハ女人甲乙の論(うん)ハ
ちぐ〳〵く拾〳〵玉。市道所の事。
其ゝ東相ふ〳〵乃出會も有
作方故ざ。ゆと評ドまた
見物 両人と共。雇ゞ事ぶ。行司 ゆで
も市ぐ〳〵ぬ。大坂屋の先生 治保壽。天
神馬場の秋元辰之進。女人と。雇

ちぬ。[コラム] ウ、その大
坂屋と云。かゝ町ぐらゐ。卯上。
鷲石流に入なぎさ馬鹿とゐる。
一生乃内。天神の額ゞ出来さ斗り。
能くと世ひ手塚ぐ [えのあき] 志の屋
先生。かすゐも先生ゞ[illegible]
まて。[行司] 行ふと
せよさいぢ[illegible]

所方部ゐ[illegible]に祢
能元氏ふ云。所
森の詰ゞ所ゆ入ゐく。当代て
の先生。[コラム] きゐも田舎侍ふ
八尺ゐ男。形骨の容ふ叶人
乃ゐ。酒色ふ耽ぶ走子供ハゞふ
しゐう。ふい貴ゐ
なしう [行司] 是

ハくぢやうひらの方のうるはしまち
ていさうませかんハうとあれ申き
先生。山椒十人も得申さかぬ
人物。追ての志ゑ申ぶんにうらく
評し申せよ

鳩巣

青木

傳ゑ人ゝとゝ月ハ上ッ法学局風
ゆうにんを言るゝ。猛義よ志ゞ
まる先生ゝとゝ。一ッ示ふハ論じられぬ
駿(すんしい)墓雑(ざつ)話や崑(こん)陽漫(まん)録(ろく)ハ多ゞ
見てゝもよひ法仏 [ひらがな] きるゝふもこ
んゝ男ゞ行る [紅葉] 法まバを持さるゝ

ぶぐうつ。なぶ法志ゞ驚しられく。
さちすしひさいまいもの法趣向。
思ひきいつる事。中くゝ面白ゝ
なゝちをする人ハるひ。崑崙
生の法勝と見へます次

熊耳

瀟水

東ゝ方熊耳ハ高なれど調ゝ
天神の一手ハ。大東世徒ゝ。いきぶこ
も遠ひ。ゆるぎいくゝぬ法
きは。西の方瀟ハ手ハなれど力
ゆゝ。芝の恥わぢのきゝる骨折。
やゝくと来為の校も出来ゝ

なるべし。

[引合] 嵯峨ぶ嶽と法印藩

ゆへ。めいしよ名ハ高りれた。元の

出ゲ一農支。[紛同] コレく又例のごる

に。近代祖来の餘光ぐかゞゆれ

まし。ちれど勝ハ態耳とそんで

られます

東涯

明霞

清ちなしなちし物ゐ師方。東涯

ふハぢ形ゐも法名の通。狂ゆづうとは

中ゐゲ。行もかもうく法ゲまるま。

まし。明霞ふも助字をよく合点

いたれ。法門人作山忠義ゐも。浪

花ゐく。一人となれます。識鑒ゐ

人ごとに。遠き勝負は分らうませよ。
まづ八ツ橋の堀川の法勝

一本堂
東洞

東の方一本堂大力はかくさをくらべ。
もっとのくきてます。土俵入ようぐんくと

いきやひとく。見てまいさ。兵庫法前
三年上下を笑されると世上ぐ噂
ごぐだる。傷を捨てく医よ偉し。師と
ひてそうあるとも。ぜ後もたのう。いろく此
乃有る方。西の方東洞みを手ハ
きてきまた。男ハでりかり仁王立ちの
初る度ぬ大丈夫。笑因下ー。寘眩く

ふ法の二ヶ所ハすたまき法ほきは
宝初江戸ふくハ誰も志ゝぬ角力
なれど。京へ上りくるまで。段〳〵法
出世今てハ仏而の男舎と吉蓋流だ
ざも世ぢも傷ぞふハ先生ゞよひと
中法する。志ゞくの元祖なれど。東
乃方土俵へ出ゝ。ゞれハ。勝ハ東西

ぞ法方ゝる。蓋別牡砺百箇寺
ハ法ゝ多

惺窩
南村

東西ゝ大男土俵入ゝハくゝる
東の方惺窩ゝハ仏を破ゝ傷ゝ

帰すべし。ゑんざんおろしの一まい
かく別なほきは。勝ハ東よこさまた

藤樹
錦里

ひつまるとくハ分なるべし。藤樹の学風
ハ格別なほ見識。錦里まことよろし

ほ弟子、ひろく。ほ 梅雨のかども
知恵奥西うしく庵ざるる。勝ハ錦里と
見まし為

玉山
周南

東の方玉山力も有り。ゑもきて固す。

ぬまを清なし法方。老婆法師の
板をふ出来まゝ。法門人かく
ある人まゝふく殘祢ん。西の方国
南に。明海旅籠の法ひきは。毛国
まゞ。麗狐ちかひきはゝ女法女
人乃仕ちハ。学の勾の主。面目。二国
乃却ぐ方にな。法女人のゝ除主ん

どゝとたゞ主と見ます。勝負ハ
主ばゞゝ所ゝまに

廣澤
南郭

法毒人ゝもゞ法毒法きゝ。力
もつる。誰ゞぶ方しぐゝぬ

コレ廣瀬ハこゝに出る角力じやアありません。
行司の同ハごとく附く居る。行司何を
出ませんでしたか。この日ゞ曲ることも
多跡ずかゝぐハばぢゝぬ。学者も有
業術もよし。生れゝ合ゝゞ別ぐ
出ぎる。今日の用て立た功ゞ度く。
手跡ゞ秀ゝしバこゝる称手跡半で

清廉しゝ成ます。遠州より出れ
こゝ以ゝ陰阻艱難をかそゝれ。
よゝゝ情ゝ成れます。今時の
出家ゝ母ゝ子ばゝなゝいゝゝ。
先生ゝ成ゝハ遠い。修力よ
学ゝゝゝゝゝゝゝゝ人ゞ押て師
出ゝゝゝゝゝゝゝゝ。廣瀬の先生と自

かんだんを出さしたるまこと天地の遠
ナントかりまし。近ごろ新報百
弦を破しく枇杷中小間
ぐ出まし。象のかぶし蚤ども
いねは世話とあります。ナント
ぐはは金兵ぐ多まし。
かぐ功ぐ。儀ふハ

はそんぐの事なしばぐくしく中
ふと及びませあ。南郭みと今の
詩人ども格別ぐ世ぐ押う
はるとパぱりの方の事ぐごぢろふ。強
義のさぐき方も商賣まんなとの
先生まちまち遠ひ。廣ひ事ぐ
ごぢろふ事巻しる組とふ様

ぢこみうれどもうれハ学問一通りの
事ハ皆是の通でハ。伝列の先生
ハ偏ゑ中して森しらんまた去るべ
き法度の大傳ふハうき法方 見物 まハ
こてぐいゑ及ゞぬ。去人の勝負ハ
どうぐ 行司 いうゑ見ハそさつぐく
ゆの物と見ますれど

ぢゑ物掛ふハ是ゞ出ゑ出ゑ
ゑ掛れますれバ。去ゞ後の君
子をまれまく。形りまた

祖来
仁齋

見物 東乃先生を大関ふ出さぬ

五百年来の滅亡を起されて。行間
まづ〳〵清ちらかませ。清人合兵の
糸るゆめよ出ませ。東の方祖来
みそ大方ふるう〳〵のまきて弁道
弁名の扱ひなぎ八思ひ切ふる
清ノまきは 五百 先生 論語徴 五〳〵
五百年眼ろ抜ふきて〳〵なひまぐ

清かちらかまる。品字の選の先ろまと訳
文答蹄ふいる清れる。時ろ附四〳〵二百
万人〳〵の川毎ろ 行間 なんぐも国の
附〳〵不ゞ清見識ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ふ〳〵ます。
面の方毎八さ毎ぐ〳〵きろ移ど。ちろ八
まけぬ大男多石を中を〳〵、ひぐ番
ら毛。中ろは。又百石の清儒宦ろ。

ハ。ようど佳よしひ。ひ。ひ。見へます。山家の
角力ハ面の方佳勝。ゆゞんなもの
出後へ出ます

蕃山白石

コヽロ サア評判ゲ学ようひ。大角の仕方ハ

ぢうぶ。行司ものゆよ高くよりても
分らぬ事。ちゞく佳まちらゞ成ませ
元来この能像ハ学の風もこゝ様
とはちがひ志の立ゆゞ大きひ。二種ハ
公の注御とゆゞ佳学の風。それ当へ
他の佳方とちがひ故事を知らの
詩文ゲよしのとゆを自負するゆよ

かるのよ[illegible]をとゝめあゝ打ませぬ。平
生の言葉よ。今日の実ゝゆよ物ことゝゝぬ
ゝゆハ学のよ。ゆゝ[illegible]ゝゝゆ。それハゝも
ゆゝ。玄ル徒歩よ初見のせゝ漢の
鄙食其高陽の一酒徒ゝゆゝ超
向ゆゝ。玄後呂川の訳ゝゆ川傍の
訳ゝゆゝ。防火乃陣中南まゝ

口半徒傷有の及いぬ度。まゝ仏
瓜のゝちを破滅いゝゆゝゆが
ゆゆゝに累断るゆゆよ論ずれど
仏有ゝゝ徒度。何と大関よ居キ
ゆゝゆ沢ゞゝ。ゆゝゆゝ。次ふ自
石先生伐論ゞゆゆゆ。是ハゝゝれ
徒森のゝゝ。初年ゝゝ一ト通ゝ乃

佐方でをごだらめ。軍然考もこの
宝ゆうしまゆ。御方の公まゝ年
ゆうしゑゝ。サヅ御りうき支がうさ
ゆうゑ世ゝ御員ハ遠石

貝原
太宰

毛利

防世作役の佐三人。一寸編じまゝ。
貝原かもゝ。行ゝゆゑ是ゝ。ゝ世
話をゆゑ。道中記まぐゝゝゝかゝ
まゝ女 見物 詩ゝれ作のゝう。温泉花
まぐゝゝゝかゝ 行司 なゝゝぐゝよく

俗にいへる如くなれども。行事の理義ゞすあませあ終ふ。大疑錄ゞ出ますべきもの乃ときの中ふなれども。生質少力細工ゝ存られます。毛利ゝ遠解りんを使くされ。俗を分れ法俗中ふ分れども。是も因法の小力。古事氏

七三

をゝ出ふ。面ハさぞ法服の立ち方もなりさまふる物ふれども。ひの毎ゝ著役ゞ多ゝ面しゝく。ん事ゞ業ふられます。親族正名ハ釈親考のむしかへ。先生持徵有れハ。野信ひる。ひの毎ゝ細ゝ有ゝ。去ゝ信長乃待中ふゞ西ひ迷出ゝれ申

むつかしき事なれども此方が治めらるれば
昔き政ふ一間と存じまする。国を治
ハ小鮮を烹るがごとしと申せバ。
是の先生は詩文にて世に逸れしハ
格別の事なこと治る。かかる事ふ不ず
貴一なれバ。是非なく治る人を並
ましめ御識鑑は有る御方は

御推見しくと有りふべし

道齋

定保

一雄二友おもふ程と申せバ。御世人とも
去古二代無しと申しければ。親不孝ふなし
御手きは。道無ふ意。信解知りを垂
くしもらぬが。吉宗氏ふ意。於而乃

なる。新仁の著述は。庚
辰を限りとせず。知不足齋の君は
ふと成れる。ふ。門人ぐるふはさぞ〳〵。
法錢をごぼうまいせふ
若勝負附。つゝ。一冊見ふかまます
追〳〵。手を吟味いたし
勝負を分ちぽ。法評判を祈ぐひまする

變語（ひんご）

損德齋 著述

近刻

海語（ひのだうこと）
第一章より廿章まで
世語（よのことば）

江戸八景

江戸繁花の地
八ヶ所び当世
晒落ぶり
天明八
戊申初春
祖